

## <共通論題>

### 日本の経常収支 ―現状、展望と政策的課題―

明治学院大学 佐々木百合

#### <主旨>

近年、日本の経常収支において構造的な変化が生じている。2005年度においては、(第一次)所得収支の黒字が、貿易・サービス収支を上回った。また、経常収支は、2007年度をピークに縮小傾向にあり、とりわけ、2011年度に31年ぶりに貿易収支が赤字となって以降急速に縮小し、2014年上半期においては、1985年以降初めて赤字となった。

経常収支には、貿易・サービス・所得収支の合計としての側面と、国内の貯蓄投資バランスとしての側面がある。したがって、日本の経常収支が縮小した要因を考察する際、為替相場の変化に伴う輸出入の変化、原油・天然ガスなどの輸入の増大といった短期的な要因と、高齢化の進展、潜在的成長率の低下、産業・貿易構造の変化といった中長期的な要因を区別し議論する必要がある。これは、近年の日本の経常収支に対する経済ショックが、どのようなショックであり、それが、一時的なショックであるか恒久的なショックであるか、さらに、それぞれのショックがどの程度寄与しているかを識別することでもある。また、世界の貯蓄投資バランスで実質金利が決定され、これが日本の貯蓄投資バランスに影響を与えることを鑑みれば、国内の要因のみならず、世界全体における貯蓄投資バランスの変化についても考慮する必要がある。

経常収支は、将来にかけての所得の時間的なパターンを所与として、消費、投資、政府支出など、支出の時間的なパターンを決定する最適化行動の結果であるため、経常収支赤字の是非そのものについては、多くの議論を必要としないかもしれない。しかしながら、国内の貯蓄投資バランスの減少は、中長期的には、例えば、国内における国債の消化問題に影響を与える。とりわけ、経常収支は、多くの投資家が意思決定をする際に着目する指標の一つであることを鑑みれば、経常収支赤字の急激な拡大や高い赤字水準が継続は、日本の財政の維持可能性に影響を与える可能性がある。さらには、日本の経常収支の変化は、国際資本フローを通じ、世界の金融市場にも影響を与えうる。

以上の背景に基づき、共通論題では、近年、日本において経常収支が減少した短期的・長期的要因、および、経常収支の減少が、国内外に与える影響について議論を行うことで、経常収支の中長期的な展望、経常収支の政策的な意義づけについて考察を行う。